

理想のキッチン大特集! インテリアから収納術、料理道具まで

ELLE DECOR

有名デザイナー、
料理家たちの
技ありキッチン!

JAPAN

The World's Leading
Design & Lifestyle Magazine

愉しいキッチン

細川亜衣

初公開! 人気料理家の“食の実験室”

ガムフラテージ

4人家族の小さくて幸せなキッチン

レネ・レゼビ

NOMAシェフの自宅キッチンに潜入!

あの人気愛用している
キッチン道具&家電リスト

鹿児島 瞳／谷尻 誠／南 貴之／渡辺有子 ほか

ジオ・ポンティの知られざるキッチン

クッションで部屋を変える!

こどもと育つインテリア

Kitchen to
Love!

エル・デコ
no.144 June 2016

6

デザインの喜びと可能性に触れる展覧会

1970年代から進行中のプロジェクトまで、三宅一生氏とチームの仕事を百数十点の展示作品とともに紹介する「MIYAKE ISSEY展：三宅一生の仕事」が開幕した。透明樹脂素材の吉岡徳仁氏デザインのグリッド・ボディも登場。佐藤卓氏の空間構成でブリーツマシーンでの制作実演展示など、もの作りの躍動的な空気を伝える。

展覧会をより楽しむヒントとして、会場を訪れたデザイナー、クリエイターに感想をうかがった。身体の考察、自由な発想と丹念なりサーチ、チーム、未知なるものに向かう勇気、タイムレスなクリエイション……。プロジェクトと共にしたり活動を長く目にしてきた9名の言葉から、三宅一生の仕事の重要性が伝わってくる。

Vassilis Zidianakis

ヴァシリス・ジディアナキス（アーティスト、キュレーター）
“布を超える「一枚の布」”

イッセイの作品を雑誌で初めて目にしたのは16歳のとき、人生に対する見方が変わりました。「一枚の布」には古代ギリシャの通じる世界があります。2004年のアテネオリンピックにあわせて開催された展覧会に私はアーティスト（ディレクター）、キュレーターとしてかかわった際、ギリシャの伝統的な服のアラゴーとして、展覧会の始まりをイッセイの「コロブ」にしました。形刻的で有機的で、「一枚の布」などは、布としての存在を超え、思考や知識を象徴するものの、インテラクティブな展示も含むこの展覧会は、アーティアスさらに次へと展開していく過程も一瞬で目にでき、感じられる。大変な刺激に満ちています。



Tyen

ティエン
(クリエイティブ・ディレクター、フォトグラファー)
“Making Thingsが生む、身体の動きとしての服”

30年前、20年前の服が今作られたかのような、タイムレスなクオリティアービング・ベンのスタジオでイッセイの服を撮った1986年から1999年、フェイスを担当していたときを感じています。ベンを信頼していたイッセイはあって立ち合はず、北村みどりさんと金井純さんが一緒にいた。ああ、イッセイのことは一日中話していられますね（笑）。クチュールを学び、伝統も尊重しながら身体と服の関係に対するヴィジョンを持っています。ベンを信頼していたイッセイはあって立ち合はず、北村みどりさんと金井純さんが一緒にいた。ああ、イッセイのことは一日中話していられますね（笑）。クチュールを学び、伝統も尊重しながら身体と服の関係に対するヴィジョンを持っています。

「Thinking Making Things」を考え続ける「Thinking Making Things」という大切なことを教えてくれます。彼の知性が身体を自由にし、身体の新しい言葉、動きの表現としての服を生んでいます。いつの時代も「自分とは誰か」は重要な点ですが、プレスされて形作られたイッセイの服を手にする人々は、自分なりの着方ができる。これが自分とのメッセージを込めることがあります。



Ron Arad

ロン・アラッド（デザイナー）
“好奇心に貫かれ、すべてが関連するもの作り”

会って1分で友人になった。そんなイッセイの展覧会だからランサートに行ひみたいで案ひで仕方なかつた！期待通りスケールの大きな展示だね。まさに彼の仕事の醍醐味がここにあると思う。全体を買く好奇心も感じる。そしてプロセス。服作りの過程を一新するなど、まさにプロダクトの視点だ。イッセイは「クリエイティブな人と仕事をするのが楽しい」とも言っていたね。信頼には難しさもあるだけに、ハーモニーを感じるイッセイの仕事には驚かされてしまう。才能豊かな人には会ってきたけれど、彼は本当に特別だ！

尾忠則が手がけた。4.「フラングリーサー」（1993年/1994年春夏）。「大地の色のブーグニアアフリカの王室に会ったとき、跳ねような服が見えた。イッセイの仕事は心に働きかける」とエドルコート。5.「ロングブー」（1990年/1991年春夏）。モノフォーマン素材を用い、ハサミを使わずに裁断、糸の代わりにスナップ留めで造形する画期的な作品。

Dui Seid

デュイ・セイド（アーティスト）
“深遠な問いに支えられたクリエイション”

1971年にパリで出会い、親友として様々なことを語っています。自分たちは全く異なる文化の国々への旅もし、その移動中にも多くのことを話してきました。実に重要な考え方や経験などござれば、凝縮せざるよう語るのがイッセイで、「身体と服の間のスペースに興味がある」といったかたちです。20年ほど前、「喜び（Joy）を生み出したい」と聞いたときに私は驚かされました。が、シンプルなようで深遠な、まさに彼のスタートメントだと思います。社会が抱える問題も知っているからこそ、恐れを抱くではなく、希望を生み、伝えている。イッセイの「Joy」という言葉が、展覧会の会場で再び強く私の心に響いてきました。

『MIYAKE ISSEY展：三宅一生の仕事』

photos : MASAYA YOSHIMURA text : NORIKO KAWAKAMI

Harri Koskinen

ハリ・コスキネン（デザイナー）
“制約を超えていくワイルドな力を感じます”

2000年、三宅デザイン事務所のMDSギャラリーで個展の展示準備をしたとき、イッセイさんがふらりと来られて、これは何？と楽しそうに質問をしてくれた。自分と同じ立場で話をしてくれる間に感動しました。その後「ISSEY MIYAKE WATCH PROJECT」や「Italia × Issey Miyake」でも三宅デザイン事務所と仕事をしています。感じるのは「ワイルド」というべきチームの力。既存の制約や限界を超えて、プロジェクトに向かっていく結果、周囲のインスピレーションを喚起している。この展覧会がファンタスティックなものその刺激に包まれているからだと思います。イッセイさんの服作りの技術を間近で目で見て、幅広い色彩も直に目で見る貴重な機会を楽しみました。



Daniela Morera

ダニエラ・モレラ（ファッション・ジャーナリスト）
“未来に向かって、ピュアにデザインを探り続けている”

イッセイがパリで初めてコレクションを発表した1973年。夫とともに出会い、以来、私たちにとって重要な友人です。40年前から知つていてもなお驚かされ、幸せな気分にてくれる。この展覧会もまさにそう。エレガントかつ軽やかで、フェリーニ映画のような美しさがあった。また、彼が教えてくれる大切なことのひとつが仕事に対する哲学。洋の東西や文化の違いを超えた対話を統け、若いデザイナーとも同様、だからこそ彼のチームのデザインは世界に伝わっていく。PLEATS PLEASEなどネーミングも見事で、彼ほどの天才はない。ほかにいるのしたら「Interview」誌で仕事をしたアンディ・ウォーホル、世界で2人だけね。

Ernst Gamperl

エルンスト・ガンペル（アーティスト）
“チームで実現し、人に届ける。ものすごく大切なことだと思う”

初めてイッセイさんに会ったのは2000年、「エルンスト・ガンペル・ガンペルの造形」展（MDSギャラリー）で来ましたときです。見てくれた何冊もの本を前に、ルースリーの作品をはじめ、アートやクラフトの話が弾みました。紹介をもらったイサム・ノグチ庭園美術館も訪ねました。イッセイさんとの会話では、「アヴァンギャルドは簡単で」との言葉が記憶に刻まれています。アヴィアで終わらせるところなく、実現して人々に届けなければ意味がない、それこそが大切なだと理解しました。僕自身、素材と格闘し、木から教わることを木に返すように日々制作しているので、強く響いた言葉です。展覧会を目にし、彼が素材に向き合う様子もまさに同じなのだ！と感じています。

special report

デザインの最前線をスペシャルリポート

